

第3回「近藤賞」

近藤賞は、OR学会創立50周年記念事業の一つとして企画・創設されたものであり、賛助会員、正会員など多くの皆様の温かいご支援をいただいた基金をもとに運用されている。「近藤」賞という名前は、言うまでもなく、本学会元会長の近藤次郎先生にちなむものである。近藤先生は、ORの分野では、PDPC（過程決定計画図）の発案や活用、国産航空機YS-11やYXの基本計画や収益シミュレーション・システムの開発などで活躍されるとともに、国立公害研究所所長、日本学術会議会長等も歴任され、2002年には文化勲章を受章されている。先生の幅広いご活躍にちなみ、広い意味でのORの分野の理論および実践に関して傑出した業績を挙げた個人またはグループに対して近藤賞が贈られる。これによって、我が国におけるORが一層発展し、この分野が広く社会に知られることが期待される。

第1回の近藤賞は、創立50周年記念式典の際に茨木俊秀関西学院大学教授（当時）に授与され、第2回は小島政和東京工業大学教授に授与された。

今回は第3回であり、機関誌やメールマガジン等を通じて候補者の推薦をお願いしたところ、締切日の2010年4月末までに多数の会員の方から複数の有力な候補者が推薦された。近藤賞の選考に関しては、会長が委員長となって選考委員会を構成することが規定されている。今回の選考委員会は数土会長、茨木俊秀、今野浩、伏見正則、武藤滋夫の各氏で構成され、慎重に検討を重ねた結果、宮沢政清東京理科大学教授が選出され、理事会で承認された。

【第3回近藤賞選考理由】

宮沢政清氏は、1976年に東京工業大学大学院博士課程を修了されるとともに東京理科大学理工学部情報科学科に勤務され、以来今日まで待ち行列・応用確率論の分野における理論面を中心とした研究で多くの卓越した業績を挙げ、海外の研究者との共同研究の成果

も多く、世界をリードするトップクラスの研究者として知られている。宮沢氏が著した英文論文は80篇を数え、JORSJ, J. Applied Probability, Advances in Applied Probability, Queueing Systems等の世界的に権威のある学術誌に掲載されている。

1980年代前半から90年代前半までの宮沢氏の主要な研究テーマは、点過程を用いた待ち行列のモデル化とその応用である。これは、客の行動の独立性を前提として組み立てられてきた伝統的な待ち行列理論が、通信システムをはじめとする複雑化した実在のシステムの分析に対応できなくなったという問題点を克服することを目的とするものであり、独立性の仮定を置かない点過程を出発点とすることにより、どの特性が本質的かという点が明らかになり、近似式や不等式を得るのに役立つ方法が開拓された。これらの一連の研究は、外国人研究者の多くの研究に影響を与えている。

1990年代後半からは、待ち行列ネットワークに関する研究成果を多く発表している。特に積形式解をもつネットワークの特徴付けに関して多大の貢献をされ、また、対象とするネットワークを一般化して、線形なトラフィック方程式をもつことと同値条件を示した。この研究に触発されて、その後多くの研究者による論文が発表された。1999年には、このテーマの研究をまとめた共著の英文専門書をWileyから刊行している。

2000年代に入ってから宮沢氏の研究テーマの中心は、非積形式ネットワークモデルにおける定常分布の解析である。特に、定常分布の裾の振る舞いに関して独創的なアイデアで優れた成果を出し、他の研究者の多くの研究を刺激している。

宮沢氏は、本学会の「待ち行列」研究部会で30年間にわたって研究をリードしてこられ、また前記の内外の学術誌やMathematics of Operations Research誌等の編集者としても活躍している。

以上のように傑出した業績を挙げた宮沢氏が第3回近藤賞の受賞者として最もふさわしいものと判断した。